

「ばあちゃんの目覚し時計」

小山陽子

\* 人物

生田剛(つよし) (17) 高校2年生  
生田加寿子(72) 剛の祖母  
遠藤佳美(17) 剛の彼女  
三島春子(46) 加寿子の次女  
水谷(48) 剛の担任  
漁師

\* あらすじ

秋、カレイや秋鮭漁が盛んになる噴火湾。その静かな町に暮らす小さな「家族」の日常。両親のいない剛は、繊細で未熟な心を持つ、地元の高校に通う高校2年生。その母親代わりとして、時に厳しく、時に優しく、口には出さぬとも深い愛情を注いで剛を育ててきた祖母、加寿子。目覚し時計の存在は、平凡な毎日の中でも確かに築かれてきた二人の絆の証でもありました。家庭環境に対するコンプレックスを抱いて生きてきた剛。その思いは誤解や嫉妬を生み、次第に苛立ちへと変わっていきます。いつも明るく元気だった加寿子の、突然の認知症。更に、自分をおいてこの世を去った母親の死の真相を知る、剛の揺れ動く葛藤。その中で「感謝」の想いと初めて向き合う剛のささやかな成長を描いています。

カチカチカチカチと秒針の音が響く。  
ジリリリリ！と目覚し時計が鳴る。  
もぞもぞと布団から起き、止める。

加寿子「よっこらせ、と」

ネジを巻き、目覚しの針を直す。  
襖を開ける音。

ギシ、ギシと古い階段を上がる足音。  
コトンと目覚し時計を廊下に置く。  
ギシギシとまた階段を下りて行く足音。

玄関が開く。  
雨。

加寿子「みぞれ混じりかい」

傘を開き、歩き出す長靴の音。

カチカチカチカチと秒針の音が響く。  
ジリリリリ！と目覚し時計が鳴る。  
扉が開き、荒々しく止める音。

剛「(伸びながら) ああ〜んんつと」

ドタドタと階段を下りていく足音。

剛M「両親のいない俺は子供の頃からずっと、  
この家でばあちゃんと暮らしている。ばあ

ちゃんの部屋には俺を産んだ女の人の写真  
が飾ってあるけど、俺はなんも覚えてない」

玄関が開き、剛が出てくる。

雨。  
鍵を閉める音。

剛「冷て」

傘を開き、自転車をこぎ出す音。  
授業終わりの鐘の音。  
教室の扉が開き、騒がしくなる廊下。

剛「佳美！」

佳美「剛、お待たせ」

剛「昼飯、どうする？」

佳美「雨だから、理科室で食べようか」

弁当を開ける音。

佳美「いただきます」

剛「サンドウィッチ？ うまそう」

佳美「剛は？ 今日のお魚、何？」

剛「カレイの煮つけ。毎日、魚ばっかだよ。

俺もハンバーグとかメンチカツとか、肉を  
食いたい」

佳美「おいしそうだよ。それにおばあちゃん  
毎日タダでお魚もらえるんでしょ？」

剛「噴火湾漁港のアイドルだって自分で言っ  
てっからな。どこがアイドルだよ。何でも

かんでもうちはババくせえよ。庭は魚臭い  
し。小学校の参観日なんて、みんな若い母  
親が来てるのに、うちだけばあちゃんが来  
るのが嫌で嫌で、何回休もうと思ったこと  
か」

佳美「フフッ」

朝のガラスの鳴き声。  
カチカチカチカチと秒針の音が響く。  
ジリリリリ！と目覚し時計が鳴る。  
止める、加寿子。

加寿子「よっこいせ」

ネジを巻き、目覚しの針を直す。  
襖を開ける音。

ギシ、ギシと古い階段を上がる足音。  
コトンと目覚し時計を廊下に置く。  
ギシギシとまた階段を下りて行く足音。  
鍋に湯が沸いている。  
トントントンと包丁の音。

玄関が開く。  
手に息をはき、歩き出す長靴の音。

カチカチカチカチと秒針の音が響く。  
ジリリリリ！と目覚し時計が鳴る。  
扉が開き、荒々しく止める音。

剛「うゝ寒みゝ」

ドタドタと階段を下りる足音。

カチャカチャと茶碗の音。

剛「(小声で)いただきます」

味噌汁をすすする、剛。

トットトットト、と港に漁船の音。

網から魚がぶちまけられる水揚げの音。  
漁港の賑わい。

漁師「加寿子ちゃん! ここんとこ、秋鮭の

掛かりがいいから、休みなくてごめんね!  
加寿子「なんも、気にしなくていいから!そ

の代わり毎日、お土産もらってるもんねえ」

ハハハハッと豪快に笑う、加寿子。

授業終わりの鐘の音。

弁当箱を開ける音。

佳美「来週、進路面談だね」

剛「うん」

佳美「剛の成績ならやつぱり大学? 札幌?」

剛「……決めてない。佳美は?」

佳美「私は、お姉ちゃんと同じ専門学校に行く  
くか、短大にするか迷ってる」

剛「短大って、札幌?」

佳美「うん。一人暮らしできるし!」

剛「ふうん……」

ストーブの上で菓缶が沸いている。  
ガラガラと引戸が開く。

剛「ただいま」

加寿子「おかえり」

剛「ストーブ、出したんだ」

加寿子「夜、冷え込むって言うからさ。さて、

ご飯にするかい」  
剛「うん」

電話が鳴る。

剛「もしもし」

春子の声「もしもし、剛? ばあちゃんは?」

剛「いるよ。(加寿子に) 叔母ちゃんから」

加寿子「春子かい? しばらくだね」

春子の声「母さん、武史が開星高校に推薦で

受かったよ!」

加寿子「開星って前に言ってた、大学付属の

高校かい?」

春子の声「そうよ! 札幌じゃ一、二を争う

進学校で部活にも強いよ。武史みたいに

部活推薦なら、大学もホッケーで行けるの

よ!」

加寿子「すごいねえ。もう大学まで決まった  
ようなもんかい!」

春子の声「そのためにあの子、勉強も部活も  
頑張ってたんだから」

加寿子「それは何かお祝いに買ってあげない

といけないね。冬休み来た時にでも。うん。  
その時に。はい。はい。じゃ」

電話を切る音。

剛「……武史が高校受かったって?」

加寿子「アイスホッケーの推薦だったね。何

だか、朝晩練習の送り迎えだの、塾の夏期

講習だの春子も忙しいって言ってたからね」  
剛「……俺はそんな生活、ごめんだけどね」

加寿子「あんたはどうすんだい? 来年3年  
生になるっしょ?」

剛「どうしようかな。早く金稼いで、遊びた  
いから、就職しようかな」

加寿子「あんたは、しようがない子だね」

教室の扉が開く。

水谷「おう。座ってくれ」

剛「失礼します」

椅子に腰かける、剛。

水谷「お前、就職って書いてるな。大学行く

気ないのか?」

剛「先生、俺さ、もう勉強したくないんだよ  
ね。だから働こうかなと思って」

水谷「お前の成績じゃもつたないと思うぞ。

本当に行きたくないのか？ ……金の心配

してるんじゃないのか？」

剛「別に金のことは関係ないよ」

自転車をこぐ音。

ガラガラと引戸が開く。

加寿子「遅かったね。また寄り道でもして、遊んで来たんじゃないのかい」

剛「うるせえな。遊ぶ金なんてもらってねえよ！」

加寿子「何だい、その言い草は！」

剛「武史には何でも買ってやるくせに、ばあちゃんは今昔から」

加寿子「何言ってるのさ。あんたも高校合格した時買ってやったさ、自転車」

剛「あれは高校通うのに必要だっただけだろ。

俺は金がなくて大学にも行けねえし！」

加寿子「大学？ あんた働きたいって言ったつしよ！ 大学行きたいなら、漁協に……」

剛「（遮る様に）どうせ、そんな金ないだろ！ 大体こうなったのは、父親のいない俺を産んで、しかも俺をおいて勝手に先に事故で

死んだばあちゃんの娘が悪いんだよ！」

加寿子「剛！ 自分の母親をそんな言い方するんじゃない！」

剛「母親なんて思ったことねえよ！ あんな写真、目障りだからいつまでも飾ってんな

よ！」

加寿子の部屋にドタドタと踏み込み、

写真立てを床に叩きつける。

ガシャンと壊れる音。

加寿子「やめなさい！」

部屋を飛び出し、階段を駆け上がる剛。かすかに響く、加寿子のすすり泣く声。

カチカチカチカチと、秒針の音がしばらく鳴っている。

シンとした廊下。

突然、ガチャツと扉が開き、

階段を勢いよく駆け下りる足音。

剛「やべっ！ 何だよ、いくら怒ってるからって」

勢いよく玄関が開く。

慌てて自転車を倒しながらも、勢いよくこぎ出す剛。

昼休みのざわついた教室。

弁当を開ける音。

ガサガサと袋を開ける音。

佳美「あれ、今日はパン買ってきたの？ 珍

しいね」

剛「ばあちゃんが作ってくれなかったから」

佳美「おばあちゃん、具合でも悪いの？」

剛「……いや」

カチカチカチと、秒針の音が鳴り続く。

加寿子の寝返りと寝息が聞こえる。

勢いよく玄関が開く。

自転車をこぎ出す、剛。

剛M「あの日以来、ばあちゃんは目覚し時計をセットして起こしてくれなくなった。それどころか、俺が学校に行く時間になっても、まだ寝ている日が多くなった」

賑やかなテレビの音。

電話が鳴る。

春子「もしもし。ああ、どうも、いつも母がお世話になってます。……いえ、元気なはずですけど。……え？」

昼休みのざわついた教室。

佳美「いつまでパン買い続ける気？ おばあちゃんに謝りなよ」

剛「うん……」

ストーブの上で薬缶が沸いている。

台所で食事の支度をする音。

剛「ばあちゃん。なあ、ばあちゃん」

加寿子「（明るく）なにさ？」

剛「……あのさ、こないだ悪かったよ」

加寿子「何が？」

剛「また朝起こしてくれよ。あと弁当も」

加寿子「毎朝ちゃんと起こしてるよ」

剛「……最近、仕事は？ 具合、悪いの？」

加寿子「（笑って）具合なんかどこも悪くないさ」

剛M「ばあちゃんは怒ってないと言いつつも、

それからも弁当を作ってくれなかったり、

嘘をついたりすることが多くなった」

授業終わりの鐘の音。

教室の扉が開き、騒がしくなる廊下。

佳美「今日のお昼は？」

剛「なんも持ってきてない」

佳美「そうかなと思って一緒に作ってきたよ」

弁当を開ける音。

剛「わあ。今日もうまそう！ サンキュー」

佳美「（笑って）でしょ？ ……でも、おば

あちゃんとは仲直りしたんでしょ？」

剛「うん……。でもおかしいんだ。最近すぐ

嘘つくし、夕飯の支度もしてくれない時が

あるし。よく喧嘩するけど、今までこんな

ことなかったのにな」

佳美「変だね……」

剛「俺のこと、面倒見るの嫌になったのかも」

剛M「本当は、何か何となくわかっていた。

やっぱり、今までのくだらない喧嘩とは比

べものにならない位、俺はひどいこと言っ

たのかもしれない」

自転車をこぐ音。

自転車を止め、玄関を開ける音。

剛「（小声で）ただいま……？」

部屋の中から話声がする。

剛M「春子叔母さんが来ていた。俺はなんと

なく、話に入ったらいけない気がして、こ

っそり聞いていた」

春子「母さん。ねえ母さん聞いてる？」

加寿子「病院、病院って。私はどこも具合悪

くないったら」

春子「だから、母さんの職場から何度も電話

があったのよ。最近、無断欠勤ばかりで

ほとんど行ってないらしいじゃない？」

加寿子「行ってないって、どこにさ？」

春子「だから、漁業組合の仕事！」

加寿子「あれさ、ほら、あれあれ」

春子「何さ、あれって？ ねえ、札幌まで行

くのが嫌なら、室蘭に診てくれるところあるのよ。一緒に行こうよ」

加寿子「（陽気に）雅子くお腹大きくなったね」

春子「母さん、雅子じゃなくて、春子」

加寿子「雅子、いくら検査結果が心配でも、

お産のことは心配するんじゃないよ。腕の

いい先生がついてるんだからね」

春子「（苛立ち）だから、母さん。雅子姉さ

んじやないの。私は春子。全く、子供の頃

から母さんは雅子、雅子って」

加寿子「雅子、栄養のあるもの作るからね」

春子「だから、春子だって言ってるでしょ！

もう雅子姉さんはいないの！ 雅子姉さん

は、剛を産む時に死んだでしょ！ いい加

減にしてよ！」

か細い声で子供のようにすすり泣く、

加寿子。

春子「（涙声で）……情けない！ どうしち

やったのよ母さん。しっかりしてよ」

玄関を飛び出す足音。

勢いよく自転車をこぎ出す、剛。

ハアハアと息を切らして、ペダルをこぐ。

泣いているようにも聞こえる荒い息。

剛M「心臓がずっとバクバク言っていた。俺

の母親はずっと、車の事故で死んだって聞かされていたのに」

ギューツと勢いよく止まる自転車。  
むせび泣き、声を震わせる剛。

剛M「俺はばあちゃんに、言ってはいけないことを言ってしまった」

階段を降りる足音。  
ガラガラと引戸が開く。

剛「ばあちゃん」

加寿子「おはよう。お弁当、できてるよ」

剛「うん……。ばあちゃん、今日仕事は？」

加寿子「仕事？ 今日日曜日だよ」

剛「今日は……。そっか。行ってきます」

授業終わりの鐘の音。  
騒がしくなる廊下。

剛「今日の昼飯、理科室行かない？」

佳美「うん」

鼻歌まじりに、弁当を広げる佳美。

佳美「いただきます！ 剛？」

剛「ああ……」

佳美「どうしたの？ 食べないの？」

剛「……いや」

佳美「久しぶりにおばあちゃんが作ってくれたんでしょ？」

剛「うん……」

ゆっくりと弁当箱を開ける音。

剛M「弁当の中を見るのが怖かった。そして思った通りだった」

剛「（言葉にならない）あ……」

佳美「驚いて（このお弁当……どうしたの？）」

剛M「弁当箱の中には、生のじゃがいもと茄子が丸のまま詰め込まれていた」

剛「（涙声）ばあちゃんが……ばあちゃんが……」

……

自転車をおしながら、歩く二人の足音。  
海の波の音。

佳美「そうだったんだ……。元気そうに見えるけど、もう七十過ぎているもんね」

剛「おかしいと思ってたけど、よりよつてばあちゃんが……。ああいうの、認知症って言うんだよね」

佳美「認知症だね。私ね、お姉ちゃんに聞いてみる」

剛「姉ちゃん？」

佳美「うちのお姉ちゃん、介護士の仕事してるの。私もね、お姉ちゃんの働くところ見

行って、同じ仕事がしたいと思ってるんだ」

剛「そうなの？」

佳美「前に言ったでしょ、お姉ちゃんと同じ専門学校に行こうかなって」

剛「札幌の短大は？」

佳美「札幌の短大にも介護福祉学科っていうのがあるんだけど。でも、別にいいの、室蘭の専門学校で。剛がこっちにいるなら」

剛「俺……。俺しかいないから、ばあちゃんに面倒見るの。だから、こっちに残るよ」

佳美「私、協力するよ！」

昼休みの賑やかな教室。  
弁当を広げながら、本をめくる音。

佳美「剛、ここ大事かも」

剛「どこ？」

佳美「（声を出して読み上げる）会話が噛み合わない、言うことがおかしい場合でも否定する言い方はせず……。だって。同調してあげましょう、だって」

剛「同調って？ 話を合わせるってこと？」

佳美「そうじゃない？」

剛「ふーん。わかった」

自転車をこぐ音。

ビニール袋をぶら下げている。  
自転車を止め、玄関に入る。

剛「ばあちゃん、ただいま」

加寿子「うん」

剛「ばあちゃん、買い物してきた。夕飯、俺が作るから」

加寿子「剛ちゃんが？」

剛「そう。あと、昨日持ってきてもらった魚の下ろし方、教えて」

加寿子「(笑って) はいはい」

授業終わりの鐘の音。

騒がしくなる廊下。

佳美「剛が？ マジで？ 作って来たの？」

剛「(弁当を開けながら) ジャジャン！」

佳美「(笑って) 何これ！ でもおいしそう」

剛「あーあ、卵焼き崩れちゃったなあ」

剛と佳美の笑い声。

職員室の扉を開ける音。

剛「水谷先生いますか」

スリッパの足音。

水谷「剛。どうした」

剛「先生、俺やっぱ、地元就職する」

水谷「そうか……」

剛「ばあちゃんがちよつと、やばくなって。

俺、面倒見なきゃなんないからさ」

水谷「ああ。こないだ保護者の件で、叔母さ

んが来てたな。その時聞いたよ、大変そうだな。大丈夫なのか？」

剛「まあね」

水谷「お前が面倒見てるのか？」

剛「うん。でも叔母さんが病院連れて行ってくれたり、金のことも色々手続きしてくれるみたいだから。俺は飯作ったり、家のことくらい。大丈夫だよ！」

水谷「お前、大人になったな。いいか、剛。勉強は後からでもできる。大学は大人にな

ってからでも、行きたければ絶対に行ける」

剛「う、うん」

水谷「これはな、慰めとかじゃないんだ、剛。大学に限らず、今実現できないことでも、必ず自分のやりたいことをやるチャンスは

いつか巡ってくるもんなんだ。忘れるな」

剛「わかった」

剛M「先生が珍しく熱くてマジ笑えた。けど、

すごく嬉しかった。後から叔母さんに聞いた話だけど、ばあちゃんは一応、俺の大学

進学のために漁協組合の学資保険を掛けていてくれたらしい。俺はなんもわかってなかった。いつか大人になって先生が言うように大学に行きたくなったら、その時に使

わしてもらおう」

自転車をこぐ音。

剛M「ばあちゃんはそれから、調子が良い

と料理をしたり、漁港の仕事にも顔を出した。意識がはっきりしない日は、一日中寝ていたり、会話がかみ合わなかったりした」

カチカチカチカチと、秒針の音が響く。ジリリリリ！と目覚し時計が鳴る。

手で止める音。

剛「ううゝ寒みゝ」

階段を下りていく足音。

剛M「それでも、規則正しい生活を送ること、で、症状が改善されることもある、と佳美に教えてもらった。だから毎朝同じ時間に起こすことにしたんだ」

襖を開ける音。

目覚し時計を畳に置く。

玄関から出てくる音。

ザクザクと、凍った雪の上を歩く。そして、雪の上を自転車が走り出す。

剛「手え、冷てえゝ」

カチカチカチカチと、秒針の音が響く。ジリリリリ！と目覚し時計が鳴る。しばらく鳴った後、手で止める音。

加寿子「よっこいしょ」

起き上がり、襖を開ける加寿子。

(終)